

佐藤和仁は恵口舞に想いを伝える決意を固めた。しかしそれももう二週間も前のことだった。

「佐藤、お前結局どうすんだよ」

「え、なにが？」

しかも、その決意を明かされている唯一の人物である同級生の矢永桜一はそのことを覚えていて、当の本人はそのことを忘れているという始末である。

矢永がため息を長々と吐いたのは当然の帰結だった。

「はああああ〜〜」

「なに、どうしたの」

佐藤はほとんど察していながら訊ねた。

「お前、告白いつするんだよ」

「えっ、あ…あまあ」

「…その時が来たらするよ」

ふたりが並んで歩くのは県一番の川幅を誇る川の、土手上の道。季節が春であることは土手に連なる桜並木の咲き具合と、土手を黄色く染める菜の花が雄弁過ぎるほどに語っている。「その時」というのがロケーションという意味を指すのなら「今」を差し置いて他になかった。次点でクリスマスというところだが、

「春になってクラス替えがあつて、運よく同じクラスになって、たくさん話せるようになったじゃん！いつでもできるよ、告白ー」

「なんで体言止め」

「佐藤」

短いひと言には突きつけるような響きがあつた。のらりくらりとかわすつもりでいた佐藤は、目をじっと見られて諦めた。彼はいじけるように石を蹴る。蹴られた石は、蹴ることで感情の行き場をつくろうとする彼から、逃げ場をなくすように斜面に生い茂る草の中に姿を消した。

佐藤は気持ちを吐露するしかなかった。

「じゃあないじゃん」

「何が」

佐藤がベンチに座ると、重永は何も言わずにその横に腰を下ろした。重永の質問はすこしの間宙ぶらりんになった。とどのつまり、佐藤は自身の考えをまとめるのに少しの時間を要した。

ふたりの目の前を小学生複数人が駆け去り、健康志向に目覚めてはや三年の四十代の主婦が走り抜け、仕事に疲れたサラリーマンが疲労でいっぱい息を吐きながら歩き、ブランド物のジャージに身を包んだ老夫婦がリードに繋がれた雑種犬に引かれる形でサラリーマンを静かに追い抜いていく。

重永はその様子を見ていたが、佐藤は顔を俯かせていた。そしてそのままぼつりとはっきりと言った。

「今までの関係が壊れるんじゃないかと思うと怖くて仕方がないんだから」
想いの丈を伝えることに二の足を踏む者は決まってそのようなことを思う。矢永は自身にその経験はなかったがそのことを本から学んでいた。彼は少ない友人のためにならあまり苦勞を惜しまない生真面目な性格をしていた。

「本で読んだ定型文みたいなこと言うなあ」

「だってヤバイよ、本コワより怖い」

「よくわかんねえよ、その例え」

「なに、体言止めにハマってるの？」

矢永はむっと顔をしかめた。自身の善意をのりくりりとかわされることは彼にとってあまり気分のいいものではないようだった。余計なことを言ってしまうそうなるのを我慢して、はつきりと物申す。

「でも、怖くても進んだ方がいいぜ。ゼツタイ」

「いやあ、まだキビしいなあ」

佐藤は物憂げにわらう。自嘲気味だ。彼は友人が笑うのを期待してそう言った。しかし、事はそう思った通りに運ばれなかった。友人は真面目な顔を佐藤に向ける。

「普段からふつうに話してるし、出かけたりもしてるじゃん。ゼツタイに大丈夫だって。向こうも気があるよ」

「なに、きみはパダワンかジェダイかなにか？ フォース使って心読めるの？」

「いや、見れば誰にでもわかる。わからないふりをしているのか？」

からかわれ、ついに言葉にいらだちが滲んだ。佐藤は知らないふりや気付かないふりが得意だった。そしていらだちをからかいの裏に隠すのも得意なようだった。

向けられたいらだちには一切目も向けず、今度は真面目に応えた。

「『誰にでも』って言われてもな。俺はお前じゃないし、お前は俺じゃない」

矢永は「そうか」と肯定とも諦めとも聞こえるようなつぶやきをこぼした。

佐藤も「そうだよー」と問延びしたのんきな返答をした。

それからしばらくの間、ふたりは無言で隣り合い続けた。彼等はそんな時間を気まぐれ感じなかった。佐藤が先に単行本を読み始めた。座ったまま夕陽の写真を撮っていた矢永も、いつの間にか英単語帳を見はじめた。ベンチの横には街灯が立っていた。十八時になると勝手に灯がつくようになっていてそれは、今日も問題なく作動した。

刻々と沈んでいた夕陽が臨界を迎えた。収束した夕光がふたりの横顔を照らしたかと思うと、地平線に静かに沈んだ。光源が街灯だけになる。ふたりは夕陽があった方を顔を上げて見たが、すぐに顔を戻した。

街灯は一定ではない周期で点滅し始めた。そうなると集中して文字を追うことが難しくなった。提案を口にしたのは佐藤だった。彼はアンドルー・ガーヴの力作——『諜報作戦／D13

峰登頂』に葉を挟んで閉じてから提案した。

「そろそろ行こっか」

「ああ、うん」

英単語帳にのめり込まんばかりの矢永は、それを閉じずに立ち上がり、佐藤を待たずに立つて歩き出した。佐藤は並ばずにその後ろを歩いた。

× × ×

佐藤には悪癖があった。自身の自己への評価と、他者による彼に対する評価の乖離が著しくあった。前者の方が圧倒的に低かった。悪癖とは、自己評価の低さだった。他人は彼を真面目だと評したが、本人はそれしかないからと卑下した。

自己評価の低さは当然利点も欠点も含む。主な利点は、謙虚であること真面目であること慎重であることの三つで、主な欠点は自身の可能性を自ら潰すこと行き過ぎた謙虚が他人への嫌味になることその結果人を遠ざけることの三つだ。

佐藤の悪癖を以って謙虚さは必ずしも良いものではないのだと学んだ人間がいる。幼馴染の恵口舞である。耐えかねた恵口は彼にそのことを何度か注意してきた。叱責も、してきた。それでもふたりの縁が切れていないのはつまり互いが互いを諦めきれないからである。

佐藤と重永が夕陽を浴びながら土手を並んで歩いた日の翌日、恵口は図書室に向かった。それはめずらしい行動だった。彼女は友人がほどほどに多くいて、本に寄る辺を求める必要性はないからだ。しかしそのめずらしい行動をとったのは友人らが皆それぞれ別々の用事で早々に帰ってしまったからだ。一度は彼女も帰ろうとしたのだが、脳裏に浮かんだ幼馴染が彼女を図書室に手招いた。つまり彼女は佐藤に会うことを期待して図書室に赴いたわけだった。

「あ」

小さな声で呟いた。ひとりを除いただれも図書室に入ったばかりの恵口の方を見向きもしなかった。カウンター内に座る例外は彼女を見て少し目を見開き、疑うように二度三度と瞬いた。

本を読んでいた佐藤は幼馴染がこっちに歩いて来るよりも前に椅子ごと横にずれた。当然のようにカウンター内に入った恵口は佐藤の空けたスペースにパイプ椅子を広げて座る。

「や」

「めずらしいね」

「まあね」

ふたりにしか聞こえない声で話す。ふたりにしか聞こえないということはそれだけ近い距離で接し合っているということだった。肩は当然触れ合った。

「なに読んでるの」

「海外の小説」

「題名は？」

「『謀報作戦／D13峰登頂』」

「どういうやつなの？ みせて」

「え、」

「なに」

「いいえ、なんでも。どうぞ」

佐藤から本を取り上げた恵口は年季の入ったその小説をぱらぱらと見ながら訊いた。彼と彼女は幼児から続く仲だった。当然、恵口は佐藤が読書に夢中になっている時は返事がどうにも信憑性に欠くことを知っていたし、佐藤も恵口の右肩あたりにほくろがあることを知っていた。だけど、彼は幼馴染が突発的に発生した機会を決して逃さない強かな性格であることを理解していなかった。

「去年、ひさしぶりに一緒に夏祭り行ったじゃん」

「え、ああ、うん」

ふたりきりではない。複数人の人物の間で共有される、昨年七月の思い出だった。

ひさしぶり、というのは中学三年間、思春期という複雑極まる感情に振り回される時期に阻まれて三年生後半以降ほとんど会話をしなかったという経緯があったために出る言葉だった。

「今年も行かない？」

「まだ五月だよ」

「だめ？ またひさしぶりにさ、屋台回ったりしようよ」

「いいよ」

「ふたりで」

「いいよ。空けとく」

良い返事を得た恵口が「はい」と本を返す。平静を完全に保ちながら彼女は立つ。

「え、帰るの？」

「え、うん。ここにいてもおもしろくないし」

「あ、そう。じゃあ気を付けて」

「じゃあね」と言っただけで図書室を出てから彼女がスキップしたことを、佐藤は知らない。そも、言葉以上の意味があるとは想像もしなかった。彼は自己評価が低いのだ。

× × ×

万全を期す。すばらしいことだ。ただしそれは計画性が伴わなければ「いつくるかもわからないいつかを待つ」という意味に成り下がる。言葉は必ずしも常に同じ意味にならない。使い手によって形は変容する。何の準備もないにも関わらず、今だ、と思った瞬間が「万全を期し

た」状態であることもあれば、何年も何十年も準備に時間を要しても「万全を期した」状態にならないこともある。どうやら佐藤和仁は後者になる機会を得たようだった。

図書室の戸締りを済ませ、下校を知らせる音楽を聴きながら玄関口へと歩く。流れる音楽は Weezer の「In The Garage」だった。佐藤は口笛を吹いた。人気のない校舎内に口笛はよく響いた。気持ちよく吹き続けていた彼だったが、下駄箱に寄りかかる幼馴染を見て吹くのを止めた。彼は驚き、彼女はなんでもない顔をした。

「あれ？ 帰ってなかったの？」

「うん。一緒に帰る友達が誰もいないから待ってた」

「いいの？」

多くの含蓄があった。誰かに見られても、俺なんかと一緒にでも、勘違いされても、からかわれても、また中学生の時みたいに周囲に何か言われても、なにかへまをして嫌な思いをさせても、などである。彼はやはり卑屈だった。

「いいもなにもないよ、いこ」

「ああ、うん」

高校の敷地から出るとしばらく田んぼが続く。だから空が広く見える。一閃、飛行機雲が伸びている。見えかけていた飛行機はすぐに山の稜線の向こうに消えていく。青と朱と橙と白と藍が混在する空を見上げて、呟かれる。

「「きれいだ」ね」

自己内で完結したのは佐藤で、同意を求めたのは恵口だった。

示し合わせたかのように目が合う。互いが互いを確認する。驚きも恥じらいもない。悔恨は認められたが、何か決まった言葉を乗せてしまえばぼろぼろと静かに腐り落ちてしまいそうな悔恨だった。そして目は静かに逸らされる。

なぜか佐藤は、今だ、と感じた。次いで、今しかない、とも焦った。

卑屈なはずの男が言った。「綺麗だよ」

卑屈さの元凶となったことを自覚していない女は誤解した。「だよね」

否定には勇気も何も伴わなかった。ただの事実を、彼は伝えた。「きみがだ」

歩きながらのやりとりだった。立ち止まることはなく、しかしころなしか歩幅がちいさくなる。一緒にいられる時間に価値を感じ、惜しむようだった。

手を伸ばしたのはどちらかではなく、どちらもだった。だから、互いに思いもよらなかったところで手が触れたことにビクツと肩を動かした。その接触の意味を先に悟ったのは読書家だった。彼は手をさらに伸ばして掴んだ。彼女はつよく握り返した。

少女漫画のような劇的さはなく、心臓の高鳴りもなかった。佐藤は不意に訪れた衝動に行動のすべてを委ね、恵口はその行動に応えた。短い間に行われたそのやりとりは尊いものだった。

翌日。重永は誰にも見せたことのない喜びを隠しきれない笑顔を見せた。